シニア
ボランティア

バヌアツ
西サモア

シニアボランティアで南太平洋の国に暮らして

若い頃に憧れた海外青年協力隊。57歳にシニア海外ボランティアに応募し、バヌアツと西サモアへ。

鈴木　和枝（すずき・かずえ）

憧れのシニア海外ボランティアで日本料理を教える

私は南太平洋の西サモアに2年間、バヌアツに1年4ヵ月間住んでいました。どちらの国もJICAのシニア海外ボランティアの関係です。西サモアは2004年から2006年の2年間、私がシニア海外ボランティアで単身赴任していました。

シェフの卵たちとチーズケーキの実習

私は若い頃、青年海外協力隊に憧れていました。しかし、学校を卒業して2年目に結婚、子育てなどですっかり遠い夢になっていました。57歳のときシニア海外ボランティアに応募してみたらと夫に後押しされて、栄養学・調理科学の案件に応募しました。これは私の永年高校で家庭科の教師をやっていたので、その集大成のような案件でした。英語に自信はなかったのですが、二次試験までパスして西サモアのポリテクニックに行くことになりました。

寿司、天ぷらを教える

ここでは18歳から23歳くらいの生徒が将来のホテルのシェフ、ビバレッジ部門、観光などのスーパーバイザーを目指して頑張っていました。私はここでシェフの卵やビバレッジのスーパーバイザーを対象に栄養学そして調理科学と併せて、日本料理、パン、菓子を教えました。

料理を教えるときに困ったことは、彼らは街でも家でも食べたことがない、見たことがないのが多いので、なかなか手順や注意点を覚えられないことでした。それでも何度か練習するうちに、天ぷらの要領や巻き寿司の酢具合などを覚えて、ファンクションのときなど彼らのアイディアを取り入れた料理も作るようになりました。

教え子に声をかけられるよろこび

国民性の違いで驚いたのは、病気がとても強力な理由になることです。ファンクションのとき、役割を決めても病気を理由に平気で休むことです。良いところは、とても親しみ深いところです。私も街を歩いていると、学校の生徒や社会人教育で教えた人達から声をかけられました。するとストレスで疲れていたのが飛んで行くようでした。

これからボランティアを希望される人は、技術は問題ないと思いますが、言葉とパソコンがストレスにならない程度に使いこなせると、もっと快適になると思います。言葉は外国人でも以心伝心は十分あり得るのですが、日本語で感謝を述べるように英語で伝えたいと思うこともあり、何度ももっと上手に英語を話せたらなあと思いました。仕事はこのようでしたが、JICAでは同期で派遣される仲間がいます。今も懇意にしていて、この年齢になって新しい仲間を作れるのは素晴らしいことだと思います。

バヌアツは2006年の6月から2007年の10月まで夫のシニア海外ボランティアの随伴家族として住みました。私の仕事は家事だけになり、南国の生活を満喫することになりました。

バヌアツもサモアも同じ芋文化圏

南国は生活も時間もゆったり流れています。マーケットハウスには村からおばさんが自分のガーデンでとれた野菜、果物、前の海で釣った魚、庭で遊んでいたにわとりなどが売られています。値段なども彼女たちの気分次第。お客は市場をグルっと見回って、それから目指す品物を買います。衣服も気候に合った可愛いドレスを着ています。これは冠婚葬祭、畑仕事も間に合わせます。私も何着も作ってもらいました。

タナ島の祭りトカダンス

食はバヌアツもサモアも芋文化圏です。そしてどちらも石の蒸し焼き料理が主です。現地で取れた野菜を食べている限り生活費は安く済みますが、乳製品、菓子、粉類、紙類など輸入物はとても高いです。そして、玉葱、人参などは船が入港しないときなどは、ほとんどの店から品物がなくなってしまいます。何か作りたい料理があるときは、品物を見つけたら買い置きをしておくことです。

教会の結婚式にアイランドドレスを着て村人と

頼もしく感じるJICAの若者たち

サモアもバヌアツも文化的にはかなり似ています。バヌアツは80余りの島で成り立っています。それぞれの島には独特の文化がまだ多く残っています。自然も手付かずがほとんどで、同じ島の他の村に行くにも島伝いに舟で行きます。病気などもカスタムメディスンがまだ幅を利かせています。便利な国に住む人から見るととても不便そうに見えますが、旅行者にとってとても魅力的な島が多いです。

サモアは3つの島に人が住んでいます。こちらは電気がほぼ供給されています。そして道路も島を縦断しています。サモアもバヌアツも村の権限が強く、警察の力よりビレッジルールが優先されることが多いそうです。村のチーフによって秩序が保たれ、国全体が治安の良い国になっています。

今回は私が家にいるということで、若いJICAの隊員達を食事に招く機会が多くありました。JICAのボランティアというベースが同じなので、話がとても弾み、人生、本、将来など、若い人達と大いに話しました。若い人達は真剣に生きているのだと改めて思い、日本の将来もこのような若者がいる限り大丈夫と強く思いました。

JICAのボランティアで良いことは、若者もシニアも価値観に共通項があり、そして自分の後には日本政府があるということで、安心して自分の持てる力を相手国の人々に発揮できるような気がすることです。会社などで培った経験を、途上国で生かしながら住むのも楽しいと思います。